

大阪湾のタチウオは何を食べているのか？

○木村 祐貴（水産研究部）

1 背景と目的

タチウオは銀白色の美しい見た目と食味の良さから水産重要種として扱われている。釣りのターゲットとしても人気が高く、特に大阪湾は全国的にも有数のタチウオ釣りポイントである。現在、タチウオ漁獲量は全国的に減少傾向にあり、資源回復に向けて早急な対応が求められている。しかしながら、大阪湾では1970年代以降、タチウオの生態について詳細な調査研究が行われていない。

そこで本研究では、近年の大阪府内におけるタチウオの漁獲状況を整理するとともに、大阪湾タチウオの生態的特性、特に食性を明らかにするため、大阪府内で水揚げされたタチウオの測定と解剖調査を行った。

2 調査方法

(1) 大阪府内標本組合におけるタチウオの月別漁獲状況

大阪府中部の漁業協同組合から1989年-2019年の底びき網漁業における月別の出漁日数、漁獲量データを収集し、1日1隻あたりのタチウオ漁獲量（CPUE）を算出した。1989-2000年、2001-2010年、2011-2019年の平均CPUEを算出し、年代ごとのトレンドを明らかにした。

(2) 大阪湾タチウオの食性

2018年11月から2020年6月に大阪府内の水揚げ市場で購入した625個体について魚体の大きさを計測し、解剖を行った。消化管内容物から出現した餌生物を可能な限り詳細に種を同定し、餌生物重要度指数割合（%IRI；割合が高いほど餌として重要）を算出した。

3 結果および考察

(1) 年代別に見たタチウオの月別漁獲状況

年代別に1日1隻あたり漁獲量（CPUE）をみると、1989-2000年では年間を通して5kg未満で推移していたが、2001-2010年になると全体的にCPUEは増加し、特に12月と1月はおおよそ15kgに大きく増加した。2011-2019年には、2月、3月におけるCPUEが大きく増加し、2019年には5月-8月にもまとまった漁獲がみられた。1970年代は水温の低下する1月から3月にかけては漁獲がほとんどない状況であったが

（林，1978）、2000年以降、12月から2月に漁獲の盛期がみられ、冬季を中心に漁獲が大きく増加していることが明らかとなった。大阪湾内の冬季平均海水温が上昇したことによって、湾内での越冬が可能になったことが要因の一つとして考えられる。

(2) 大阪湾でタチウオは何を好んで食べているのか？

消化管から出現した餌生物のうち、種まで同定できたものは魚類が9種、甲殻類が5種、頭足類が2種であり、表層性から底生性の種まで様々な生物を摂食していた。%IRIはカタクチイワシが約80%でもっとも高く、ついでソコシラエビ、アキアミ、マイワシ、コノシロが続いた。今回測定したタチウオを体サイズ（肛門前長）によって小（ $\leq 220\text{mm}$ ）中（ $220 \leq 270\text{mm}$ ）大（ $>270\text{mm}$ ）の3つのサイズ帯に大別し、それぞれの%IRIを算出した結果、いずれのサイズ帯においてもカタクチイワシがもっとも重要な餌生物であった。また、小、中サイズではソコシラエビ等の小型甲殻類が利用されているのに対して、大サイズでは魚類がほとんどであった。以上のことから、本種は成長に伴って魚食性がより強まる傾向がみられた。